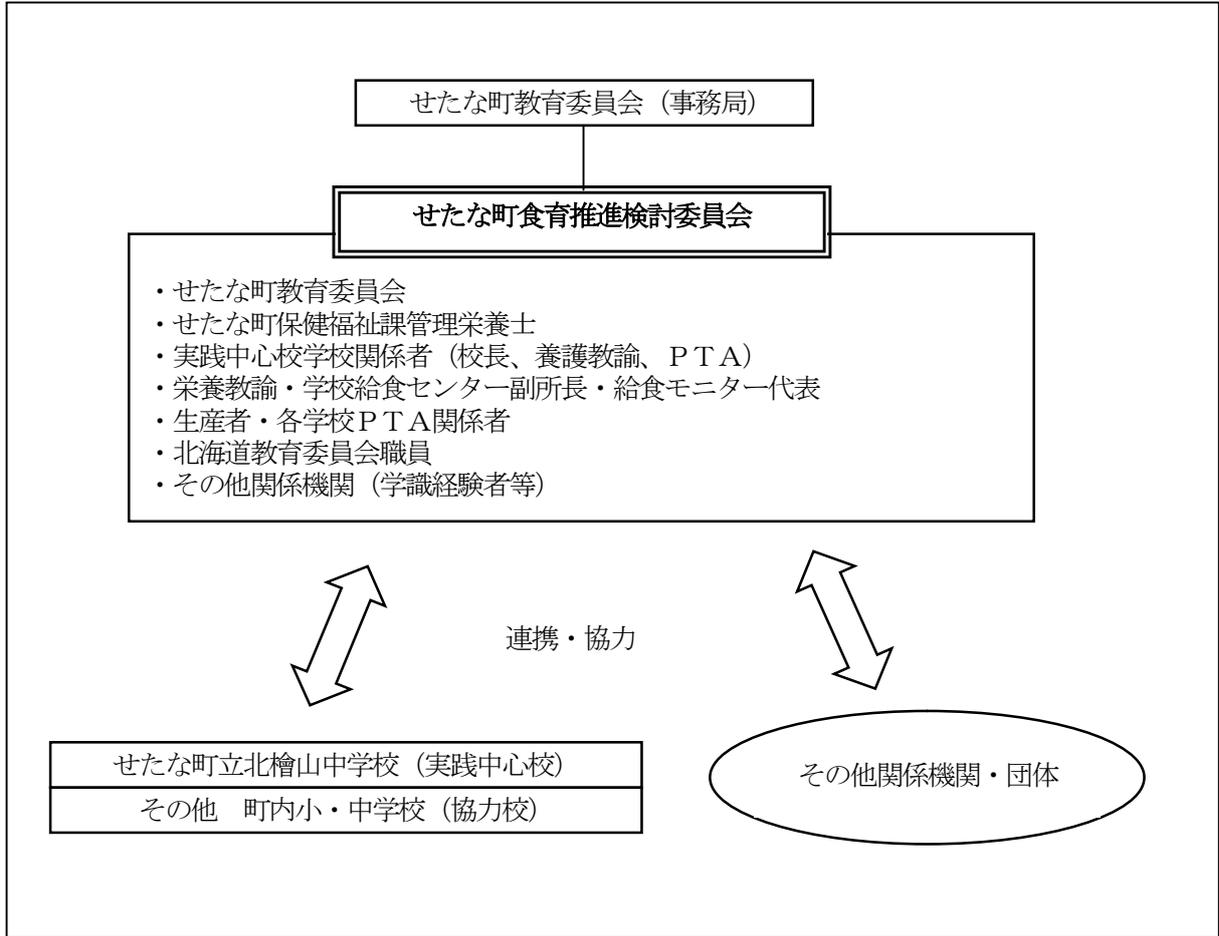


再委託先名

せたな町

1. 事業推進の体制



2. 事業内容

テーマ1

学校・家庭との連携を深め児童・生徒の食に関する意識を高める取組

1 「食に関するアンケート調査」の実施

- (1) 調査対象：町内の小学校及び中学校の全児童生徒
- (2) 調査内容

- ・ 普段、学校のある日に、朝ご飯を食べているか。
- ・ 好き嫌いをせずに何でも食べるか。
- ※家族と一緒に朝ご飯を食べているか。
- ・ 食事の手伝いをするか。
- ※朝食を食べない理由は何か。
- ・ 給食時間は楽しいか。
- ・ 普段、学校のある日は、何時に寝るか。
- ・ 給食は残さず食べるか。
- ・ 普段、学校のある日は、何時に起きるか。
- ・ 給食の好きなメニュー
- ・ 朝、すっきりと目覚めるか。
- ・ 給食の嫌いなメニュー
- ・ 家族と一緒に夜ご飯を食べるか。
- ・ 夜遅くに間食をするか。
- ※間食として、どんなものを食べるか。

2 栄養教諭と学級担任が連携した各学校における「食に関する指導」の実施

(1) 北檜山中学校（実践中心校）での実践

【第3学年】

題材名	健康と食生活について
本時の目標	・実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な食に関する知識を習得し、生活の質をよりよくしようとする能力と態度を育てる。
食育の視点	・生活の中で食事が果たす役割や健康と食事との関わりを理解する。(食事の重要性) ・自分の生活に課題を見付け、望ましい生活習慣を理解し、自らの健康を保持増進しようとする。(食事の重要性) ・身体の発達に必要な栄養や様々な栄養素の種類を知り中学生の栄養について理解する。(心身の健康)

(2) 瀬棚小学校（協力校）での実践

【第1学年・第2学年】

題材名	給食ができるまで
本時の目標	・食事を大切にし、食物の生産等にかかわる人々に感謝する心を育む。 ・食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身に付けることの大切さを理解する。
食育の視点	・食事を作ってくれた人に感謝することができる。(感謝の心) ・食事のマナーを考えて楽しく食事ができる。(社会性)

【第3学年】

題材名	しょくじ・うんどう・すいみんトリオで丈夫な体
本時の目標	・自分の生活習慣の課題を見付け、改善しようとする。 ・生活習慣が自分の成長・発達や健康に与える影響や健康な生活をするために必要なことがわかる。
食育の視点	・日常の食事に興味・関心をもつことができる。(食事の重要性) ・食事、運動、休養を意識し、健康を意識して生活することができる。(心身の健康)

【第4学年】※第4学年については、協力校の馬場川小学校でも実施した。

題材名	おやつを食べ方
本時の目標	・自分の生活習慣の課題を見付け、改善しようとする。 ・生活習慣が自分の成長・発達や健康に与える影響や健康な生活をするために必要なことがわかる。
食育の視点	・日常の食事に興味・関心をもつことができる。(食事の重要性) ・自分の食生活を見つめ直し、よりよい食習慣を形成しようとする。(心身の健康)

【第5学年】

題材名	バランスのよい食事を考えてみよう
本時の目標	・バランスよく食べることの大切さを理解し、好き嫌いせずに食べることが健康になるということがわかる。
食育の視点	・いろいろな食べ物を好き嫌いをせずに食べようとする気持ちをもたせる。(心身の健康) ・様々な食べ物の名前や、その働きについて理解できる。(食品を選択する能力)

【第6学年】

題材名	正しいダイエット
本時の目標	・正しいダイエットについて理解し、正しい食習慣、生活習慣が健康につながることをわかる。
食育の視点	・いろいろな食べ物を好き嫌いをせずに食べようとする気持ちをもたせる。(心身の健康) ・様々な食べ物の名前や、その働きについて理解できる。(食品を選択する能力)



「食に関する指導」は、第4校時に設定し、その後、各教室で給食を食べ終わるまでの時間で事後指導を実施した。

(3) 食育推進検討委員会及び給食試食会の実施

(ア) 食育推進検討委員会

せたな町では本事業の実施にあたり、「せたな町食育推進検討委員会」を設置し、計3回の会議を行った。おもに、本事業全体の趣旨や事業推進日程、研究内容などを示すとともに実践の成果を評価した。

(イ) 給食試食会

食育推進検討委員会の構成員による給食試食会を実施した。

a 当日の献立

- ・ ご飯 ・ 牛乳
- ・ 味噌汁 (豆腐、わかめ、玉ねぎ)
- ・ えびと野菜の包み蒸し
- ・ いんげんの炒め物
- ・ りんご 1/4 個

b 試食会の感想

- ・ 大変おいしかった。
- ・ 給食の時間が短い
- ・ 地場産の食材を活用していて良かった。
- ・ 活動量の少ない大人には、量が多く感じられた。
- ・ 野菜が多く使用され、食材のバランスも良く工夫された献立だと感じた。

◎食育推進委員会の様子



(4) 食育講演会の開催

- ・ 実施日：平成24年12月12日
- ・ 場 所：せたな町民ふれあいプラザ
- ・ 講 師：学校法人 鶴岡学園 北海道文教大学 木藤 宏子 氏
- ・ 演 題：「生きる力」の土台は「食べる力」から育まれる
～家庭における共食の重要性と「生きた教材」学校給食～

・ 講演内容

なぜ、今『食育』が必要とされているのか、豊かになり過ぎて「食べる」という、生きていくうえでもっとも大切な行為が、軽視されて来ている今だからこそ、「家庭」・「親子」の食卓を重要視しなければならない。

「食べる」ことと「生きる」ことが実感として直結しない時代だからこそ『食育』が大切であり、本当の意味でのおいしさを味わうこと、食事づくりに参加することなど楽しみを取り入れながら、家庭のみならず、地域も含めて児童・生徒を見守ることのできる環境作りを心掛けていくことが大切である。

[参加者の感想]

- ・ 家庭における食育の方法について具体的に説明があり良かった。
- ・ 身近で具体的な例を挙げての説明がわかりやすく納得できる内容であった。

◎食育講演会の様子

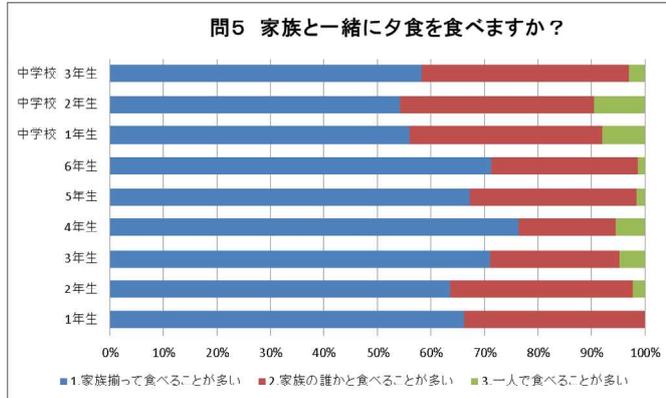


テーマ1～3に共通する具体的計画

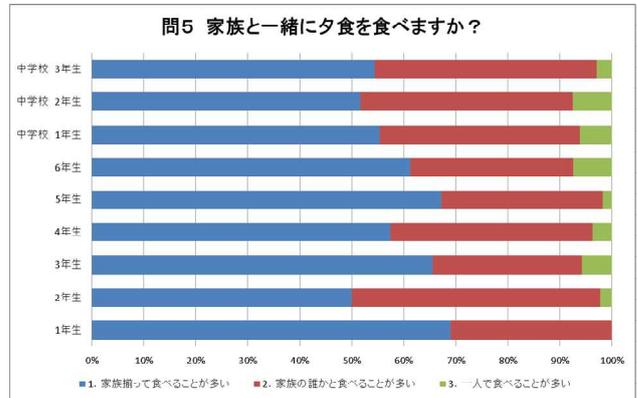
1. 家族で夕食を食べる割合

A 51.2% → 65.5%
(家族揃って食べる割合)

◎第1回アンケート調査結果



◎第2回アンケート調査結果

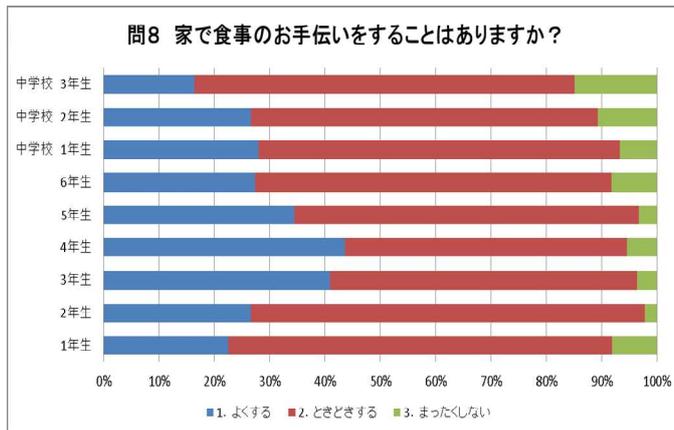


朝食についてはおおむね食べてはいるが一人で食べるという割合も少なくない。また、夕食時に一人で食べることや、家庭での手伝いについては高学年のみならず低学年にも見られる。その後の取組によって、家庭での食事にも変化が見られ、児童・生徒と家族が食卓を囲む機会も多くなっている。

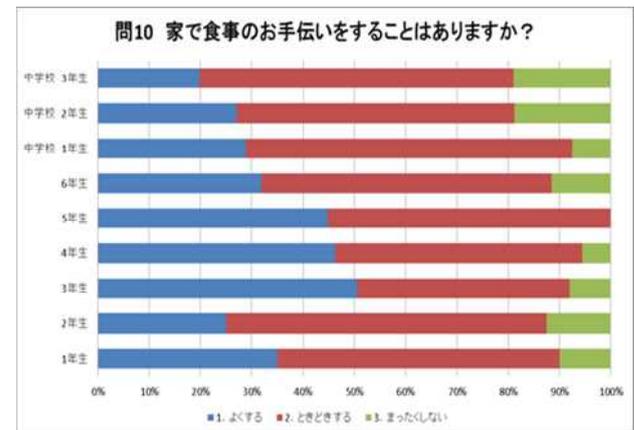
2. 家で行う食事の手伝いをする割合

A 89.1% → 92.6%

◎第1回アンケート調査結果



◎第2回アンケート調査結果



各家庭での取組の意識の違いが見られ、児童・生徒の意識はもとより、今後は家庭への働きかけをより一層進めていく必要がある。その後の取組によって、児童・生徒の意識の向上とともに、家庭での声かけが増えてきた傾向にある。

3. 残食率について

例1)

小魚入り小松菜のゴマ酢和え			
	指導前	→	指導後
1年生	71%	→	57%
2年生	73%	→	13%
3年生	74%	→	52%
4年生	76%	→	31%
5年生	83%	→	48%
6年生	67%	→	48%

例2)

ツナサラダ			
	指導前	→	指導後
1年生	72%	→	41%
2年生	70%	→	42%
3年生	74%	→	58%
4年生	33%	→	41%
5年生	37%	→	15%
6年生	46%	→	26%

食に関する指導後の行動変容として、残食率の低下がみられたことから、好き嫌いせず何でも食べよう、という気持ちや、作ってくれる人に感謝の気持ちをもって、残さずに頑張るって食べよう、という指導によって意識が高まったと考えられる。

本事業における評価指標と考察

- ①朝食欠食率 ※H24年度食生活に関するアンケート調査 第1回と第2回の比較より
16.8% → 12.1%
- ②地場産物活用率 ※H24年度3月現在
37.8% → 36.9%
※地場産米(ななつぼし)、若松ポークマン(豚肉)、木綿豆腐、納豆、手作り味噌 など
- ③残食率 ※23年度残食量調査と24年度残食量調査の比較より
～副菜～ 29.8% → 23.6%
～主食～(米飯を対象) 21.5% → 18.4%

本事業の成果

本事業の取組により、朝食欠食率の減少、偏食(好き嫌いをする)割合の減少、残食率(主食、副菜)の減少、家族揃って夕食を食べる割合の増加、家で行う食事の手伝いをする割合の増加などがアンケート調査を行った結果から見えてきた。

また、アンケートの数値のみならず、各学校での『食に関する指導』においても、児童・生徒の意見や感想にも好き嫌いせず何でも食べようという気持ちや、作ってくれる人に感謝の気持ちをもって、残さずに頑張るって食べようという意見や感想が多くなった。さらに、給食試食会などを通じて、学校給食が家庭における児童・生徒とのコミュニケーションの話題として輪が広がり、学校や家庭が連携・協力し、児童・生徒の高まった意識を継続させようという『食育』への浸透が図られた。

今後の課題(今回の事業を実施した結果、新たに見えた課題)

本事業による取組の成果をより充実したものにするためには、児童・生徒の高まった意識を継続させ、日常的に行われるような環境づくりを整備していく必要がある。単発的な取組で終わってしまうことのないように、各関係機関が連携・協力しより一層の『食育』の普及・推進に努めなければならない。

今後は、学校給食試食会や食育講演会などの機会を多くすることや、関心の薄い家庭などを中心に食育に関心のもてる取組内容の検討が必要であると感じる。そして、より充実させていくために、さらに実態に沿った意識の向上を図る取組を推進していく必要がある。